

「一行詩」の勧め (2)

—投影法としての「一行詩」妥当性の検証—

○平岡清志 (姫路獨協大学)

後藤桂子 # (姫路獨協大学)

キーワード：投影法，一行詩，いじめ

平岡、後藤 (2015) は、『一行詩』が、単純且つ簡単に作れ、率直にその人の心の状態を表すので、それを作ることによって、自己の内面に気付く、浄化 (カタルシス) にもなり、明日への内発的動機付け、ひいてはキャリア教育の一環にもなりうるのではないかと考える。

そこで、本研究では、通信制高校に通う元不登校生を対象にした、一行詩によるキャリアサポートプログラムの実践事例を通して、一行詩の背景・一行詩の機能を鑑み、投影法のテストとしての利用を提案したい。

“あの目の朝、言えばよかった。「行ってらっしゃい、お父さん」と”

A 生徒は学校でいじめにあった腹いせで、教師だった父に八つ当たりした翌朝、父に「行ってらっしゃい」が言えなかった。その日の夕刻、父が交通事故で即死、自分が殺したのだと 5 年間思いつめた。その気持ちを一行詩に書いたとき、「お前には今もたくさんの方がついてる」と父の声が聞こえてきて救われ、初めて前向きに生きようと思えたと報告している。彼女はその後、文化祭の運営を積極的に行い、ホールで照明のボランティアをするうち自分も表現者になりたいと思うようになり、現在横浜の映画大学で学校を舞台にした脚本を書いている。封印してきた思いを自己開示することで、自己の過去と今と未来を見つめ直し、一歩踏み出すことが出来た事例である。

“おばあちゃん、まだまだ頼りにしているよ。”

B 生徒のおばあちゃんは、しっかり者で田舎で言う「しゃんとこべえ」。嫁姑の仲が悪く、自分は祖母の味方をせざるを得ず、家族関係に神経をすり減らしてきたという。一行詩では「おばあちゃん、これからは元気でいてね。私は歳をとっても畑に精を出すおばあちゃんを誇りに思っているよ」といって最後に「おばあちゃん大好き」と本音を吐いた。彼女は、田舎の食材で老人ホームの方に元気に長生きして欲しいと、管理栄養士の資格を目指している。一行詩に、母との葛藤、祖母への想いを率直に表出し、祖母の作る作物への愛着から、進路を見極めていったものである。優しさゆえに自分の気持ちを抑圧してきた B 生徒が心情を率直に表出できた時、やりたいことが見えてきた。

“友よ、「生きてみたら？やりたいこともあったんじゃない？」と言ってくれてありがとう”

これは、放送部の先輩からいじめを受け、死を思い詰めていた C 生徒が、「友よ」という一行詩を書くにあたって、自分のために声をかけてくれた友人の存在を思い出してしたためたものである。彼はその後、ラジオ番組に出演して、この友に感謝のメッセージを伝えた。その後 IT 関係の専門学校に通う傍ら、このラジオ番組の音響を担当している。彼が卒業間近に書いた作文には「忘れたかったはずの記憶が忘れたくない記憶へと変わった。辛いことも詩になった。大切な友の存在を一行詩が思い出させてくれた。」と記している。そして「過去の自分に会って、僕は今こんなに楽しく生きてるよ。だから泣かないでと言ってあげたい。」と語った。

“生きてるって素晴らしい”

D 生徒は、両親の離婚後、母親の恋人に虐待を受けた幼少期のつらい記憶を封印して生きてきた。寒い冬の日、家から追い出され、凍えそうになりながら抵抗した過去の自分に向き合い、「今生きていることが奇跡だ。あのときの勇気がなければ今の自分はない。」事を気づき、「折角守った命だからやりたいことをしたい」と自分の過去の境遇を受容するになっている。

“集団にまみれて本当の自分を見失い 一人になるのが怖くて また偽りの自分を作り出す”

E 生徒は、「自分がどうして人間関係に躓くのか、一行詩を書くまでわからなかった。一行詩が本当の自分を思い出させてくれた。自分は本来人間が好きで積極的な人間だったはず」と述べ、本当の自分を取り戻すためにオーストラリア留学を果たした。今、もっとコミュニケーション能力を伸ばしたいと国際コースへの進学を目指している。

一行詩は、自分の潜在的な自意識を投影し、内発的動機付けを促し、心理検査としての機能を果たすものと期待される。